



平成28年度 太平洋いわし類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成29年4月~7月)のポイント

海況

黒潮は、4月前半はC型^(※1)となる。以降6月まで小規模なB型^(※1)・C型で変動し、7月にB型となる。
沿岸水温は、潮岬以西が「平年並」^(※2)~「高め」^(※2)、熊野灘~伊豆諸島北部海域が「平年並」~
「高め」で一時的に「低め」^(※2)、房総~常磐南部海域が「平年並」~「やや高め」^(※2)で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

B型：八丈島の北を通過、流路南端が北緯32度以北で33度以南

C型：八丈島の南を通過

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、やや高め=平年値+1.0℃程度、

高め=平年値+1.5℃程度、低め=平年値-1.5℃程度

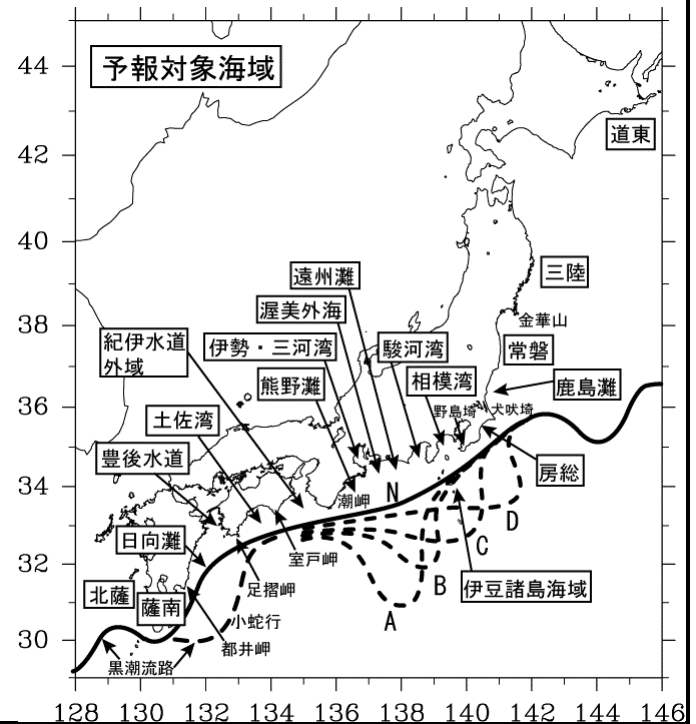
漁況(来遊量予測)

マイワシ

熊野灘以西では前年を下回り、
伊勢・三河湾以東では前年並~上回る。

カタクチワシ

前年並の海域が多い。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 中央水産研究所

担当：業務推進部 野上、市橋

漁況：資源管理研究センター 銭谷、渡邊、由上、上村、古市

海況：海洋・生態系研究センター 杉崎、清水

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2017年4月～7月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、3月下旬に小蛇行が形成され、離岸傾向で推移する。
- ・都井岬～潮岬沖では小蛇行の東進がみられる。

◎潮岬以東

- ・4月前半はC型となる。
- ・以降、6月まで小規模なB型・C型で変動する。
- ・7月にB型となる。
- ・房総沖では、離接岸を繰り返す。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、小規模な擾乱の東進に伴う一時的な暖水波及がある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域には暖水が波及する。ただし、4月～5月は一時的に冷水域に覆われることがある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね暖水域に覆われるが、一時的に冷水域に覆われることがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮の変動に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。4月～5月は一時的に「低め」となることがある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね「高め」で推移するが、一時的に「低め」となることがある。
- ・房総～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2016年12月～2017年3月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・12月中旬、C型からN型となった。
- ・1月上旬、B型となった。
- ・1月下旬、C型となった。
- ・以降、小規模な変動はあるものの概ねC型で推移した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、12月は屋久島南付近の平均的な位置、1月は接岸、2月は離岸で推移した。

◎潮岬以西

- ・12月中旬、都井岬沖で小蛇行が形成された。
- ・12月下旬以降、都井岬～潮岬沖では小規模な擾乱の通過はあったものの接岸傾向で推移した。
- ・2月下旬以降、種子島南東沖で黒潮が大きく蛇行している。

◎潮岬以東

- ・12月、南方から熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・1月中旬～下旬、黒潮内側反流が形成され、伊豆諸島北部海域から熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・2月中旬、南方から熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・2月下旬、黒潮統流域から西進してきた冷水渦が黒潮内側域に取り込まれ、房総沖で大きく離岸した。
- ・3月上旬、熊野灘～駿河湾は概ね黒潮内側の冷水域に覆われた。伊豆諸島北部は黒潮の南北変動により暖水が波及した。
- ・伊豆諸島南部海域は、12月～1月中旬は概ね黒潮の南の暖水域に、1月下旬～2月は概ね冷水域に覆われた。3月上旬は黒潮の南北変動により暖水域に覆われている。
- ・房総沖での黒潮は、12月は概ね離岸で推移し、1月は接岸傾向となり、2月には離岸傾向となった。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・12月～1月、広く暖水に覆われた。
- ・2月、暖水の影響が残っている。

現 況 (2017年3月14日現在)

(1) 黒 潮

- ・ 種子島南東沖で大きく蛇行している。
- ・ 冷水域が遠州灘沖と房総沖にあり、黒潮は伊豆諸島の西側で北上して八丈島付近を流れ、伊豆諸島の東側で南下している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～潮岬沖で「やや離岸」～「接岸」している。

◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に覆われている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が見られる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

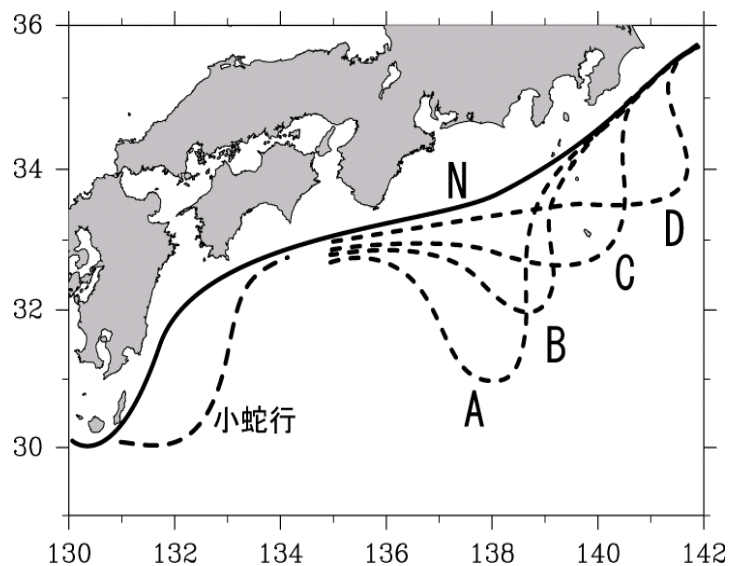


図1 黒潮流型の分類

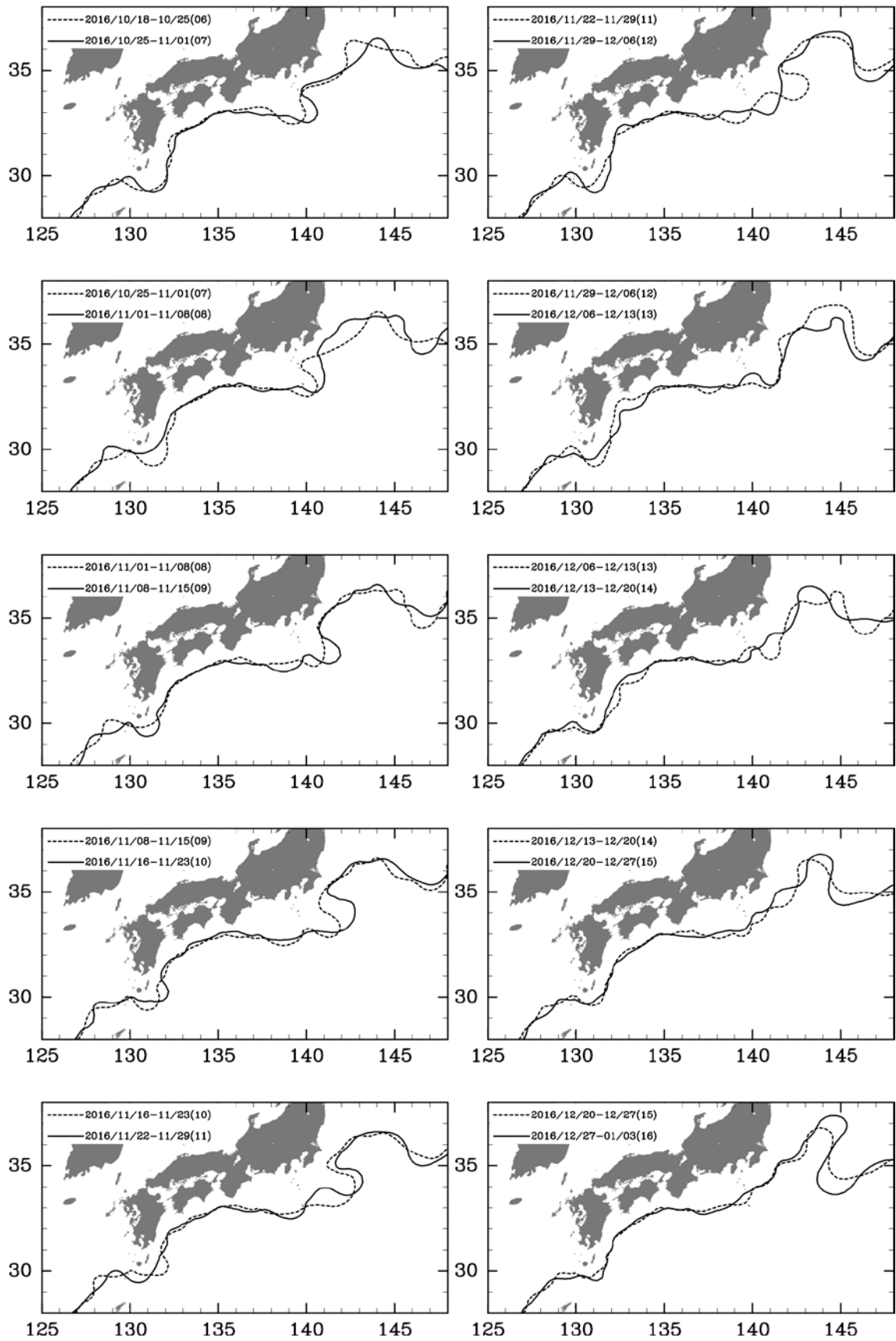


図2 黒潮流軸のパターン

(2016年11月~2017年3月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

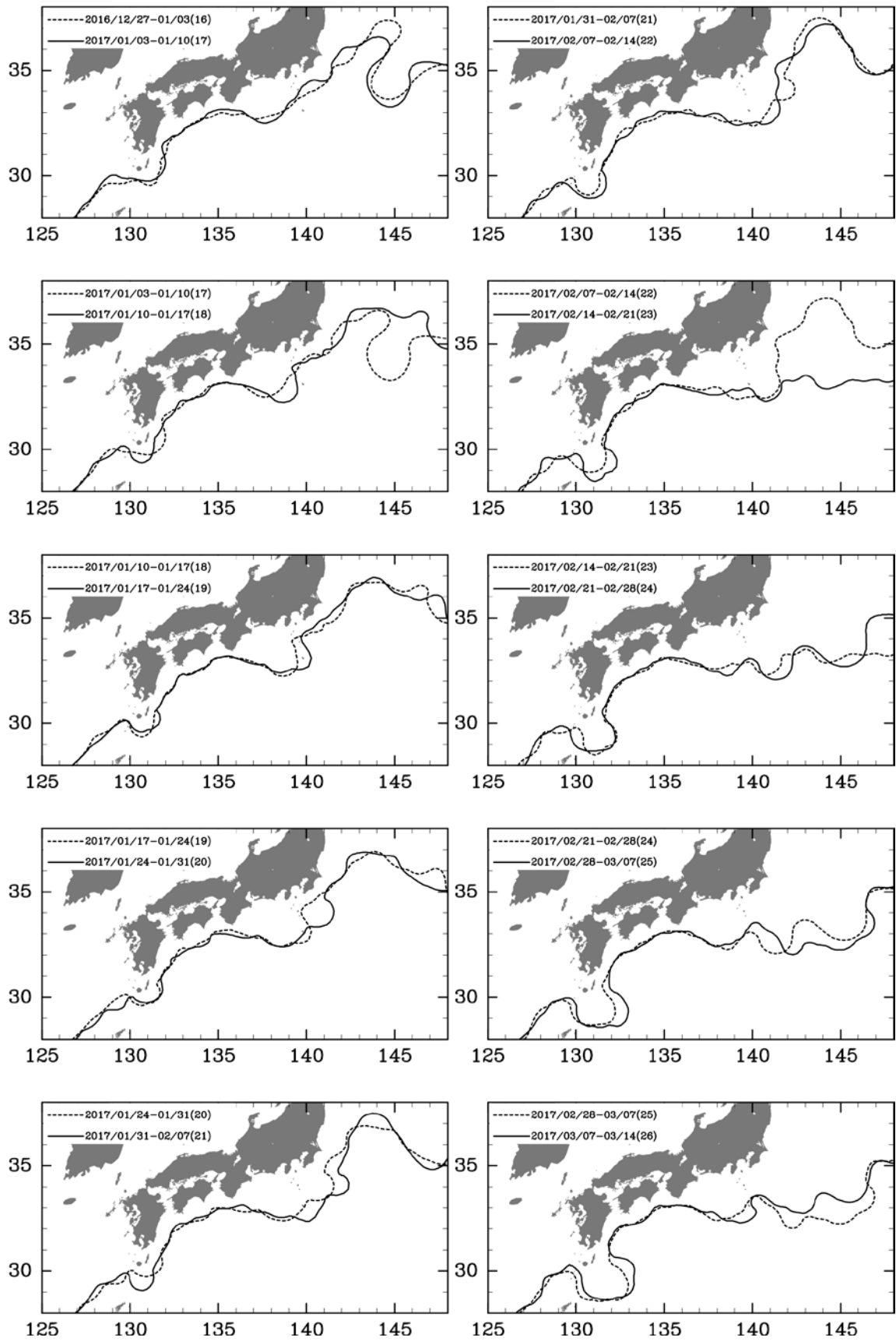


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2016年11月~2017年3月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年4月～7月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）、3歳（2014（平成26）年級群）、
4歳（2013（平成25）年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 渥美外海～駿河湾のマシラス（船曳網）

- (1) 来遊量：渥美外海では前年並。遠州灘～駿河湾では前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：6月まで漁獲される。

2. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並。紀伊水道外域東部～熊野灘では前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：北薩～豊後水道南部では、4月は15 cm～18 cm（1歳魚）、5月以降は6 cm～13 cm（0歳魚）。宿毛湾、土佐湾～紀伊水道外域では6 cm～12 cm前後（0歳魚）および13 cm～20 cm前後（1歳以上）。熊野灘では13 cm～19 cm（1歳魚）および19 cm以上（2歳以上）。

3. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- (1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾では前年並～上回る。
- (2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海では6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では12 cm未満（0歳魚）。駿河湾、相模湾では13 cm～20 cm（1歳以上）、期後半には14 cm未満（0歳魚）も漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、犬吠埼周辺～常磐南部海域で断続的に、5月中旬以降は三陸南部海域でも散発的に形成される。仙台湾～三陸南部海域の定置網では5月以降漁獲される。
- (3) 魚体：15 cm～16 cm前後（1歳魚）、17 cm～18 cm前後（2歳魚）および19 cm～20 cm前後（3歳魚）主体。21 cm以上（4歳以上）が混じる。

漁況の経過（2016年12月～2017年2月）および見通し（2017年4月～7月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1970年代に増加し、1980年代は1千万トン以上の高い水準で推移した。しかし1990年代に入って減少し、1994年には100万トンを下回り、その後1999年まで70万トン～90万トン程度で推移した。それからさらに減少し、2002年～2007年まで10万トン台の低い水準で推移した。その後、2008年～2014年に比較的良好な加入が続いたことと漁獲圧が低下したことにより、2014年には103万トンに増加した。さらに2015年の極めて高い加入量により資源量は増加し、2015年は186万トンと推定された。

2013年級群（4歳）以上は、漁獲の対象となるが、残存資源は減少している。

2014年級群（3歳魚）は、平成28年度資源評価において、加入量が139億尾と推定されており、近年において比較的高い値となっている。また、2016年における2歳魚としての漁獲状況は、前年を大きく上回っていたなど、高い豊度を示している。以上から、残存資源は2013年級群の同時期を上回ると考えられる。

2015年級群（2歳魚）は、平成28年度資源評価において、加入量が561億尾と推定されており、極めて

高い値となっている。2016年における1歳魚としての漁獲状況は前年を下回っていたが、加入量は極めて高い水準であることから、残存資源は2014年級群の同時期を上回ると考えられる。

2016年級群（1歳魚）は、産卵量の段階では343兆粒と、2015年（231兆粒）を上回り、2011年以降の高い水準にあった。沖合域の調査では、5月～6月の移行域調査（中央水研）に基づく加入量指数が102.6と、2015年（101.5）と同程度の値を示した。9月～10月の秋季浮魚調査（中央水研）においても多く漁獲され、CPUE中央値は2015年を下回ったものの、2010年以降2番目に高い水準であった。2016年における0歳魚としての漁獲状況については、前年並であった。以上から、2016年級群の加入量水準は、2015年級群を下回るものの、比較的高いと判断される。

2017年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することはできない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マシラス

伊勢湾では、12月に漁獲されているマイワシは成熟しており、2月のボンゴネット調査等でもマシラスが採集されていること、マイワシ太平洋系群の資源水準も中位、増加傾向であり、卵稚子の輸送も期待できることから、来遊量は前年並に高いと見込まれる。遠州灘～駿河湾においても、生殖腺の発達した個体が漁獲されており、駿河湾内～湾外にマイワシ卵が多く補給されていると期待されるため、来遊量は前年を上回ると見込まれる。

2) 未成魚・成魚

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、5月以降、0歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。現在のところ予測は困難であるが、今年の1月～2月に、産卵親魚と思われる1歳魚（2016年級群）の漁獲が非常に低調に推移していることから、前年を下回ると見込まれる。

日向灘では、4月の漁獲の主体となる1歳以上は、2月末までの漁況が前年を大きく下回っており、今後の加入も見込めないことから、前年を下回ると見込まれる。5月以降主体となる0歳魚は、マシラス混獲率が1月は前年をやや上回ったが、2月は前年より低く、また、日向灘における成魚の漁獲量も前年を大きく下回っていることから、前年を下回ると見込まれる。

豊後水道南部では、1月～2月の漁獲量（1歳魚主体）が前年を大きく下回ったため、1歳魚が主体となる4月の漁獲に期待は持てない。5月以降は0歳魚が主体となり、現時点ではその来遊は不明だが、産卵親魚となる1歳魚の漁獲量が前年より少ないことから、前年を下回ると見込まれる。

宿毛湾、土佐湾では、冬季の土佐湾におけるシラス漁および宿毛湾における小型まき網漁の漁況から、0歳魚の来遊量は前年を下回ると見込まれる。さらに、宿毛湾における中型まき網の漁況から、1歳魚以上の来遊量も前年を下回っている。定置網では、前年および平年を上回ったものの、水揚量は多くない。従って、全体としては前年を下回ると見込まれる。

紀伊水道外域西部では、標本漁協における2016年12月～2017年2月の漁獲量がほぼ皆無だったが、例年この時期の漁獲量は非常に少ない。近年は資源水準が比較的高いと推測されることから、来遊量は前年並と見込まれる。

紀伊水道外域東部では、3月の漁獲量が多い年には4～6月の漁獲量も多い傾向があるが、3月上旬のまき網の漁獲量は、42.1トンと低調である。以上から、1歳以上の来遊量は前年を下回ると見込まれる。

熊野灘では、今期の漁況は産卵群の来遊に大きく左右されると考えられ、例年、産卵が低調となる5月以降は低水準になると予測される。また、今年は前年より早く産卵盛期に入っていること、前年は小型で成熟も遅れていた2歳魚が4月に主体となっていたことから、今期の産卵群の逸散は前年より早まる可能

性も考えられる。以上、総合して判断すると、今期のマイワシの来遊量は、前年を下回ると見込まれる。2月以降はマサバを主体に好漁が続いていることから、この状況が続く限りマイワシを主対象として操業する機会が少ないことも想定される。

- ・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：今期の漁獲対象は、この冬春季に発生した0歳魚、および1歳以上の越冬後の未成魚・成魚である。北薩、薩南海域では4月は16 cm～18 cmの1歳魚、5月以降は8 cm～13 cmの0歳魚が、日向灘では4月は15 cm～20 cmの1歳以上、5月以降は6 cm～12 cmの0歳魚が、豊後水道南部では4月は15 cm前後の1歳魚、5月以降はと6 cm～12 cmの0歳魚が、宿毛湾、土佐湾～紀伊水道外域では6 cm～12 cm前後の0歳魚および15 cm～20 cm前後の1歳以上が、熊野灘では13 cm～19 cmの1歳魚および19 cm以上の2歳以上が、それぞれ主体となる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、近年の傾向から、来遊する1歳（2016年級群）以上は少なく、漁獲の主体は春生まれの0歳魚（2017年級群）と考えられ、来遊量は前年並と見込まれる。

駿河湾、相模湾では、1歳以上が主体となる。資源は全体として増加傾向であり、2015年級群、2016年級群ともに高い水準の年級群と考えられることから、来遊量は前年を上回ると見込まれる。

- ・漁期・漁場：伊勢湾・三河湾、渥美外海では6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では、12 cm未満の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾では、13 cm～15 cmの1歳魚が主体に、18 cm～20 cmの2歳以上も漁獲され、期後半には14 cm未満の0歳魚も漁獲される。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2016年級群）、2歳（2015年級群）および3歳魚（2014年級群）主体に、4歳（2013年級群）以上が混じる。2016年級群（1歳魚）は、2015年級群を下回るものの高い水準と考えられているため、来遊量は前年の1歳魚を下回るものの多いと見込まれる。2015年級群（2歳魚）は、1歳魚としての漁獲量は前年を下回ったものの、加入量は極めて高い水準であることから、今期2歳魚としての来遊量は前年を上回ると見込まれる。2014年級群（3歳魚）は、3歳魚としての漁獲量が前年を上回るなど高い豊度を示しているため、今期の来遊量も前年を上回ると見込まれる。以上より、漁獲の主体となる年級群の来遊量は、前年を上回ると見込まれる。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、犬吠埼周辺～常磐南部海域で断続的に、5月中旬以降は三陸南部海域でも散発的に形成される。仙台湾～三陸南部海域の定置網では5月以降漁獲される。

・魚体：15 cm～16 cm前後の1歳魚、17 cm～18 cm前後の2歳魚、19 cm～20 cm前後の3歳魚が主体となり、21 cm以上の4歳以上が混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年4月～7月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～土佐湾では予測が困難。渥美外海、駿河湾では前年を下回る。相模湾では前年並。
鹿島灘～常磐南部では前年並。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南では前年を下回る。日向灘、豊後水道西側では前年並。豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：4 cm～11 cmの0歳魚および1歳魚が主体。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では前年並。伊勢・三河湾、渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾西部では前年並～下回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：8 cm～14 cmの1歳魚および2歳魚が主体。伊勢・三河湾、渥美外海で期後半に7cm以下（0歳魚）が主体。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総・常磐海域では前年並～上回る。三陸南部海域では前年を下回る。三陸北部海域、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：常磐・房総海域は6月まで。三陸南部海域の定置網は5月以降。

(3) 魚体：9 cm～11 cmの1歳魚主体。

漁況の経過（2016年12月～2017年2月）および見通し（2017年4月～7月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は1998（平成10）年から2010（平成22）年まで70万トン～150万トンで推移し、2015（平成27）年の資源量は15万トンと推定された。資源水準は低位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2015年級群（2歳魚）は、2015年漁期に伊勢湾以東の海域でシラス漁況が好調であったが、その後の漁獲に反映されていない。2016年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季

浮魚調査（中央水研、9月～10月）において、10 cm以上の魚体で漁獲され、現存量、有漁点（漁獲のあった調査点）CPUEはいずれも前年を上回ったものの低水準であった。2016年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）における1歳魚（2015年級群）のCPUEは前年並の低い水準であった。また、2015年11月～2016年6月の房総・常磐海域での11 cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は6千トンで、前年（5千トン）並の低い値であった。これらの動向から、2015年級群は最近10年の中で見れば低水準と考えられる。

2016年級群（1歳魚）は、2016年漁期のシラス漁況が低調で前年を下回ったが、0歳魚を主対象とする2016年秋季の房総沿岸2そうまきの漁獲量、西日本海域における0歳魚（2016年級群）の漁獲量は前年を上回った。2016年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）において0歳魚（2016年級群）は採集されなかった。沖合域では、2016年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）における9 cm以下の推定現存尾数、2016年の秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）における9 cm以下の有漁点CPUEは、前年を上回ったものの非常に低い水準であった。以上の状況から、2016年級群のうち沖合回遊群は低水準と考えられるが、沿岸発生群は現段階では総合的な水準判断が困難である。

2017年級群（0歳魚）は、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

西薩～土佐湾では、今後2歳魚主体の大型成魚の来遊は少ないと予測されるが、シラスの漁場形成については予測が困難である。渥美外海では、黒潮流路がB型基調のため暖水の波及が起りやすい状況にあるものの、九州南沖の冷水域を伴った蛇行が東進すると沿岸部が冷水域に覆われ、漁場が形成されにくくなると考えられることから、来遊水準は前年を下回る。遠州灘～駿河湾では、前年同期は暖水波及などの海況の好条件によりシラス漁況が好調であったが、今期は前年ほどの暖水波及が見込めないため前年を下回る。相模湾では、近年の漁獲傾向および2017年1月～3月のシラス分布調査結果から、今期の漁獲主体も例年どおりカタクチシラスと考えられる。カタクチシラスは大型成魚の資源が依然低水準と推定され、来遊量は前年を下回ると見込まれるが、マシラスは資源動向から3月～4月に前年以上の来遊が期待できる。以上のことから、今期の来遊水準は前年並。鹿島灘～常磐南部では、今後の海況がシラスの来遊に適した「高め」の水温で推移し、シラス漁の初漁のきっかけとなる暖水波及は3月～4月に発生すると予測されている。また、マイワシ資源の増加により、5月～6月まではマイワシシラスが多く混獲されると考えられるため、来遊量は好調であった前年並。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

北薩、薩南海域では、2016年12月～2017年2月の来遊水準が好調であった前年を下回り、2016年の春季と秋季のシラス漁は平年並であったことから、好調であった前年を下回る。日向灘では、近年、常磐・房総海域から南下する大型成魚の来遊はほとんどないこと、沿岸で成長・加入する群れ（沿岸加入群）の指標となる2016年10月～12月の宿毛湾のまき網漁獲量は前年並であることから、来遊水準は前年並。豊後水道西側では、例年4月～6月は1歳魚が主体に0歳魚が漁獲される。2017年1月～2月の1歳魚の漁獲

量は前年を上回ったことから、予測期間中の1歳魚の来遊量は前年を上回ると考えられるが、南部海域のシラス漁は前年を下回ったことから、0歳魚の漁獲量は前年を下回ると予測される。総じて来遊水準は前年並。豊後水道東側では、豊後水道外海から来遊するとみられる2歳魚（2015年級群）の資源量が前年を下回ると評価されているが、周辺海域における2017年2月までの漁況において、0歳魚（2017年級群）および1歳魚（2016年級群）の漁獲量が前年を大きく上回ったことから、来遊量は前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では、冬季の土佐湾におけるシラス漁および宿毛湾における小型まき網漁の漁況が前年を下回ったことから前年を下回る。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲はない。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

熊野灘では、12月～2月と4月～6月の漁獲量に正の関係がみられる。2016年12月～2017年2月の漁獲量は前年を上回ったものの低水準で推移したことから、来遊量は前年並。伊勢・三河湾、渥美外海では、春季に近海で発生した0歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となると考えられるが、来遊量は少ないと予測されることから、低い水準であった前年並。駿河湾、相模湾西部では、漁獲の主体となる1歳魚（2016年級群）および2歳魚（2015年級群）の資源水準が低水準と推定されていることから、前年並～下回る。相模湾東部では、漁獲の主体となる1歳魚（2016年級群）および2歳魚（2015年級群）の沿岸加入群の資源水準は前年と同程度であると考えられることから前年並。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

常磐・房総海域で漁獲されるカタクチイワシは、大型成魚（体長12cm～13cm）と小型成魚（体長9cm～11cm）の小型成魚で構成され、例年、前年漁期の小型成魚が翌年に大型成魚となって再来遊する。前年同期の小型成魚の漁獲量は低い水準で推移し、2017年2月までの漁況において大型成魚がほとんど漁獲されなかったことから、今後も大型成魚の来遊量は低水準と考えられる。また、沖合回遊群と考えられる1歳魚（2016年級群）および2歳魚（2015年級群）の現存尾数は、2016年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）から前年を上回ったものの、非常に低い水準であると推定された。一方で、2016年秋季の房総周辺海域における沿岸加入群の0歳魚（2016年級群）の漁獲量は前年を上回った。以上の状況から、来遊量は前年並～上回る。漁場および体長については近年の傾向および最近の漁獲物の体長から判断した。三陸南部海域の定置網では例年5月から水揚げがあるが、各年級群の資源状態およびこれまでの漁況経過から、来遊水準は前年を下回る。三陸北部、道東海域の定置網では、予測期間中の来遊は前年同様、ほとんどないと考えられる。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所